

近世日本における三大文豪といえば、まず第一に、群書類従の塙保己一。第二に、日本外史の頼山陽。第三には、近世日本国民史の徳富蘇峯を挙げなければならない。

武蔵の国に生を受けた塙保己一（一七四六—一八二一）は七十五歳、安芸の国に生まれた山陽外史（一七八〇—一八三二）は五十二歳、九州の熊本に呱呱の声をあげた徳富蘇峯（名、猪一郎、一八六三—一九五七）は実に九十五歳の長寿を全うしている。この三文豪は、共に歴史をテーマに大きな文物を後昆に垂れている。

三文豪の文風について強いて形容を試みるならば、塙保己一は学者的—論理的、山陽外史は文人的—芸術的、徳富蘇峯は新聞記者的—常識的ということができよう。

蘇峯翁逝いて八年。今秋、日本橋白木屋において「徳富蘇峯展」を開催した。畏友宮田武義氏（山水楼主人）が永年蘇峯翁に親炙し知遇を得て来た縁に因り、展覧会の手伝いをする事になって、塩崎彦市、清水董三、胡蘭成などの方々に教示を受けながら、骨を折ってみると、蘇峯の本領が通りいっぺんのものでないことがわかってきた。これは私の人生にとって大きな拾いものであった。僅かな紙面で英才を以て、表題に示すような大それたことを企てるのは盲人の象を按ずるの図に似たることは百も承知。翁の「首陽の兄弟応に相笑うべし、鉄面頑民未死の人」の句に力を得て敢て駄文をつらねる腹になった。

前述の「新聞記者的」などという言葉は、実は展覧目録の序中の胡蘭成氏の言葉である。胡氏は往年の南京政府の要人。論客としてその名を謳われた人。目下日本に滞在、清水、宮田両氏の知友。私は胡氏を現今の中国—東洋の良識を代表する人と思う。この人が若

し日本に来ていなかったら、私を含めて多くの日本人が蘇峯の馨咳にふれる機会を失ったろうと思う。特に翁の書の恩沢において。そういう意味で私にこれを敢て書かせたのは胡蘭成氏であるといっても過言でない。

翁の詩でも句でも、どの一句を捉えてみても、独善的な創作文句はなく、いずれも平明であり、難解なところはない。そして迂遠な故事を特に引用して自己の鑑蓄を人に強いるようなところがない。新聞記者的というのはこれを用いるのであろう。それでいて文の響が非常に強いのは、胸に万巻の書を羅ね、読書大義に通ずという偉大人格のあらわれであらう。

書においても、一点一画が全く正確で、なにかを頼り、それを人に押しつけるところがない。強いていうならば、東坡を愛した翁は、東坡の風格をもち、米元章、黄山谷の姿態をとっているといえないことはない。それは、黄山谷が東坡を評して魯公、楊風子、李西台の筆意を兼ねているといった寒食詩が全くその通りでもあり、また東坡独自であるように、蘇峯は特立独行である。九十を過ぎてからの書は、三昧の域に入り、胡蘭成氏が評しているように泰山の石經に伍しているということが出来よう。蘇峯翁の詩書は、ジャーナルの骨である。

誕生七絶（作年未詳）

誕生文久三年の春、火国西南燐海の浜、辱無く栄無く苦楽なし、四朝の恩沢一皇民。

ト将来二十年七言（大正十二年）

嶽雪波光瑞烟を帯ぶ、笑うて迎う花甲一周の天、人間百事消磨し尽し、唯禱る残生二十年、唯禱る残生二十年、文章敢て擬す馬遷の編巍たり明治聖天子、盛徳宣揚して千古に伝う、君民相信じて道相全し、文章報国意なきに非ず、唯禱る残生二十年。大正癸亥元正感あり、卒に賦して以て将来二十年の後を卜すと爾か云う、蘇峯迂人湘南野史亭に書す、時に歳六十又一

花甲は華甲、華の字は十の字が六つと一の字からなるので、六十一を表わし、甲は甲子の甲である。六十一歳の還暦をいう。馬遷の編は漢の司馬遷の著作した史記を指す。

莫上高樓七絶（昭和二年）

高樓に上つて嘆嗟を発する莫れ、樓前の富岳乱雲遮る、期せず勲業千古に伝うるを、却つて余生を托して史家と作る。蘇峯老人時歳六十又五

手形の賛（昭和九年）

油屋大掌居士に奉る、蛇蜂先生蘇峯老人をして手模せしむ。昭和九年十月念一、油屋別墅由布院に於て、蘇峯七十二叟、油屋という手の大きな人がいた。その人が翁の手形をとるといってきかないので、翁は九州の由布院にある油屋の別荘で手形を押しした。油屋の大將に対して蛇蜂の先生と自称したのはユーモラスである。念は廿。

これは昭和十二年に出版された「蘇峯百絶」の巻頭に載せられた題詩である。次の詩はそれの中から選んだ二首で、大正十二年の還暦以後昭和十二年七十五歳に至る間の作である。癡はおろか。岫泉は山の穴から湧き出る泉。

山王草堂新居 二首

湘南と帝郷とを来往し、悠々身世ふたつながら相忘る、余生老いんと欲す那の辺か好き、占め得たり山王の一草堂。

高臥は碧山に棲むを須いず、生を寄す半市半村の間、蓬蒿地に満ち過客なし、雲外の長松独り関を護る。

満腹経綸七絶（昭和十三年）

満腹の経綸民を済わす、等身の著作猶お貪を憂う、長笥短布白頭の客、好箇芙蓉峯下の人。宮田雅宗之を正せ、蘇峯七十六叟、この詩は、宮田武義氏が翁に贈った鄭孝胥愛用の狼毫筆で書いたもので、峯下の峯の右波法に、鄭孝胥に似た線が出ているのも面白い。翁の深遠な眼識と練達な筆技が相俟って、こういうユーモアが発現するもので、書き終わって両者が莞爾とした情景が目に見えるようである。

倦鳥七絶（昭和十五年）

倦鳥林に還り夕日遅し、水光雲影互に奇を争う、誰に向かつて説与

湖海虛名七絶（昭和十年）

湖海の虚名徒らに厚顔、半生老を悔ゆ風塵の間、寧ろ期す修史千秋の業、頑骨依然故山に對す。船山詞宗風塵の間を改めて俗塵の間となす、理まきに然るべし、但し予は詩人に非ざるなり、三年運用す必ずしも深く咎めざるべきのみ、蘇叟七十三

詩の大家（詞宗）船山大人との、風塵と俗塵の論議は面白い。あなたの理くつはそうでも、わたしは三年間「風塵」を使いつづけるから悪く思うなよ、と言うあたりに頑蘇の真髓が窺われる。この問答にもユーモアが漂っている。

唐の李商隱の詩に、「終台の駅長風塵に老ゆ」という七絶がある。この駅長が七十三歳で「過客甲子を詢うを勞せず」という。なぜかという、この駅長は「亥字を書して時人に与う」というから、過客は駅長の年が七十三であることをみんな知っている。亥字の篆体を分析すると、二万六千六百六十となり、この数字の位数は七十三年余となる。この話を昨年の温故叢誌に書いた。佐藤一斉も七十三歳の時にこの故事に基いて詩を作った。七十三歳の蘇峯翁が「風塵」を三年間墨守し続けると頑張るのは、この故事に則り風塵の中にも三年、その後には自ら進んで俗塵に入るの概を示したものと思う。余は詩人に非ざるなり、君とは感覚が異うんだといって、相手をからかっているのではなからうか。

蘇峯百絶の題詩（昭和十二年）

前賢に倣わず奇を衒わす、短吟長嘯わが癡に任す、孤雲岫泉に出で地を行く、此れ是ち蘇峯野客の詩。蘇叟七十五

せん斯の心境、独立蒼茫岳に對するの時。昭和庚辰秋季皇靈祭日老蘇七十八

倦鳥は遊び疲れた鳥。

扶桑有一十五言（昭和十五年）

扶桑に一士あり、志を立てて先賢を慕う、独り帝王の学を修め、聖賢の前に述べず、空しく経綸の策を抱き、四海の辺に施さず、胸に書万巻を羅ね、囊に山を賣うの錢なし、顔齡七十八、孤櫛膝を擁して眠る、寵辱は吾与らず、窮通は唯天に任す、豈専心の友莫からんや、仰いで望む芙蓉の嶺。七十八初度自述、老蘇陳人、孤櫛は孤牀、ひとりねの寝台。

我喜山亦喜五言（昭和十六年）

我喜べば山も亦喜ぶ、我憂うれば山も亦憂う、我に双翼無しと雖も碧霄常に神遊す、我に塵累ありと雖も、白雲頭上に浮ぶ、蓮峯はこれ我が友、相對して日に悠々。老蘇七十九、蓮峯は富岳。塵累は塵埃と煩累。昭和十年の時の湖海虛名七絶で風塵を固執した翁は、それから六年経ったこの詩では、俗塵のつもりで塵累を用いている。記憶のいい翁はこんな点にもちゃんと意を用いている。

慷慨五言（昭和十九年）

慷慨また慷慨、幽憂更に幽憂、借問す底事かを憂う、語らんと欲すれども自由ならず、四海誰か知己ある、膝を抱いて吟じて嘸々、何

ぞ似たる長松の下、仰いで白雲の浮ぶを見るに、何ぞ似たる碧巖の上、俯して滄溟の流るるを瞰るに、行雲と流水と、天地自ら悠々。老蘇八十二

歌々は憂えなげくさま。杜甫に「天陰雨濕声嗽々」の句がある。翁はこの年の七月一日に東条首相と会見している。この詩はきつとその前後の作と思われる。「語らんと欲すれども自由ならず」という表現は全く露骨である。往年の論客が言論を全く剝奪されて「四海誰か知己ある」といい孤軍無援のかたちで「膝を抱いて嗽々」に至っては、国運の落ち行く先も知れていたらう。

北宋の時、新法党の首領王安石一派が廟堂を占拠して、旧法党（元祐党）の蘇東坡などを放逐流謫した始末と似ている。東坡はこの時黄州に貶せられ、ここで前後赤壁の賦を書いた。その時に黄州寒食の詩二首をもつかった。寒食の詩第二首の最後の部分が次のように吟じられている。

「……那んぞ知らん是れ寒食、但だ見る鳥の紙を銜むを、君門深きこと九重、墳墓万里に在り、也た塗窮に哭せんと擬す、死灰吹けども起たず」

絨口令の重庄の下に、言論の自由を奪われた状態を、鳥の紙をふくむとしたい、自分の政治生命の没落と再起不能を、壁にぶつかって突き、消えた火の灰は吹いても起つてこないと慨いている。膝を抱いて嗽々、というさまはまさにこの状態をいう。東坡のこの詩巻は、もと日本にあった。詩の末尾に「右黄州寒食二首」とだけしてあり、蘇軾の落款の無いのは前年筆禍に問われたことを慮つてのことと考証されている。

蘇軾翁の「日本男児」や「神国日本」が、巷間誤解を受けて独善

いない。泰平とせずに太平としたのは妙。半切に書かれたこの詩は太を特にフテフテしく書いて全体の調子を破っている。民心が不安で物情騒然たる当時の状況、義理人情地におち、チューインガムを噛む女だけが日本を代表して颯爽として闊歩していた。この情景を滄海横に流れると描写したあたり、千金の貴禄を発揮して余すところなし。この七絶は出品せず私の手許にある。翁の詩は尋常一様のものではないから、その筆蹟と併わせて鑑賞すべきである。

和歌（敗戦直後の作と思われる）

何事も変り果てたる世の中に

むかしなからの不二の神山

翁は八十三歳を以て敗戦を迎え、一切の公職辞表を内閣に送った。間もなく戦犯容疑者としての扱いを受けるに至った。晩晴草堂には以前にくらべて訪れる人も少なかった。昭和二十二年九月一日戦犯がようやく解放した。

新島先生の書に題す五絶（昭和二十一年）

真理寒梅に似たり、敢て風雪を侵して開く、人生精進の業、渾て克艱より来る。 頑蘇八十四

この詩は、戦犯容疑者の心境を寒梅に譬えてうたったものである。前二句は新島先生の句、あとの二句は静峯詞友の需めに応じて翁が加えたものであり、新島先生の意を得たものか否かを知らないが、統制の識を免がれないであろう、という意味が書いてある。統制とは善美なものに粗悪なものを附け加えること。なお九十四歳の時、同志社の八十周年記念に「先哲の志」と書して新島先生を偲

主義者や單純右翼と混同されるむきがあるので茲に蛇足を補って然云う次第である。

忠憤衡天五言（昭和二十年）

血涙誰がためにか揮う、丹心と白首並う、滄桑転瞬の変、八十三年の非、客来って世事を談ず、世事煩に勝えず、相送る衡門の外、青山笑って言わず、君看よ屋上の旗、飄飄として風の吹くに任す、借問す男児の国、何人か骨あるの児、狡兎大機を弄して、款を納れて闇中に飛ぶ、憐殺す七千万、誰か首陽の薇を采る、昨は非にして復た今は是、何れの処にか真機ある、誰か知る是非の外、白雲頭上を飛ぶを。頑蘇八十三 岳麓忍辱庵に於て 昭和二十年九月念一 冷雨蕭条の朝 頑蘇老人

これは紙でなくて杉の炬燵板に書いてある。なお「忠憤天を衝く」という題字がある。滄桑之變は桑畑が變じて海となることで時勢の急変することをいう。衡門―隱者の家の門。狡兎―ずるい小もの。款―款言（そらごと）。

進駐胡兵七絶（昭和二十一年）

進駐の胡兵颯爽として過ぐ、満都斉しく唱う太平の歌、波に随い浪を逐う吾が事に非ず、滄海横に流るるを竟に若何にせん。 頑蘇八十四

波に随い浪を逐うとは定見なく時流に追隨迎合するをいう。進駐軍を胡兵といい、胡兵のスマートさに比べて、敗戦国民のみじめな姿といじらしい顔つきが目につく。胡兵に阿諛した舌足らずの唄―これは今では満都でなく全国に唱えられているが―太平の歌にちが

んでいる。

胡蘭成氏は南京政府の領袖汪精衛氏の寒梅の詩を胸中に秘めている。その詩をここに録して風雪の人を併わせて偲びたいと思う。

梅花素心有り、雪月同一色、照徹す長夜の中、遂に天下をして白からしむ。

談笑死生七絶（昭和二十一年）

死生を談笑する何ぞ奇とするに足らんや、乾坤を再造する是れ男児人謀は天機の動くに若かず、請う看よ潮来り風起るの時。奥村仁兄晩晴草堂を過訪せらる 欣然相迎え卒に賦して誨を乞う 再生頑蘇 頽齡八十四

奥村喜和男氏の来訪を受けて、にわかに活気だち、ジタバタしても仕様がな、天機胎動の期を待つ心境をうたっている。再生頑蘇が欣然相迎えるよろこびに対して、八十四と翁が特別に使う又を特に入れてあるあたりに気を留める必要があろう。

和歌（昭和二十一年）

獅子は吼え虎は嘯く夢覚めて

枕に通ふ庭の松風

昭和二十一年十二月初八の夕、枕上作あり 蘇峯正敬

特に日を記してあるのは、この日は敗戦後二度目に迎える大東亜戦開戦記念日だからである。昭和十九年の懐疑五言の「行雲と流水と、天地自ら悠々」が、枕に通う松風となつて現われてきている。熱海の晩晴草堂の庭には、数十本の老松が枝を交えて草堂を囲んでいた。

自画自賛（昭和二十二年）

獅子一吼すれば百獣の腦破裂す。 頑蘇八十五

この句は達磨に似た自画像の賛である。翁が若し生き永らえて、即今の社会情景を見たならば「百獣の腦腐敗して獅子黙然」とでもいうならんか。

句（昭和二十三年）

一場の春夢覚めて痕なし。戊子八月 百敗院泡沫居士類齡八十六
翁の法名は「百敗院泡沫頑蘇居士」。これはおそらく自製の戒名だろうと思う。有髪の僧であつた蘇峯和尚はこんなことにお布施を出して本職をわすらわすことはしない。然るべき筋で受戒されたなら「百敗院殿泡沫頑蘇大居士」とされ、庶民の列から外されて迷惑することを知っていたらうから。敗戦直後に白木の位牌にこの戒名を自書してあつたので、それから十年目の昭和三十三年十一月二日永眠の際には、すぐにこの位牌が枕頭に立てられた。

自画の達磨に賛（昭和二十四年）

当坐遺縁諸公二任ス、私シハ仮睡ノ五百年。 頑蘇八十七
このだるまは睡眠でなく仮睡状態だから、茶碗の音にすぐ目をさます。当時のひどい物資逼迫時代を想うと、五百年の仮睡とは少し図々しい達磨である。

句（昭和二十四年）

丈夫剛腸を貴ぶ。 頑蘇八十七

剛腸を貴ぶと共に「忍辱を以て瞋恚を損し禪定を以て乱意を損す」といい、翁は「和氣平心」を念願としていた。

豆海五絶（昭和二十四年）

豆海の潯に栖遲して、松風独吟を伴う、頭上嶺雲白く、脚下煙水深し。藤井国手一桀 頑蘇八十七
藤井国手は翁の侍医であらう。一桀は下手な詩をお笑い下さいという意。

和歌（作年未詳）

伊豆の海ゆ寄せ来る波に言問はん
幾代を経なば本に復ると 菅原正敬

病叟呻吟語（昭和二十四年）

伊豆の山人御機嫌如何が
年はとりても氣は強い
俺の恋人誰かと想う
神の遣った日本国

己丑六月 頑蘇八十七

敗戦以来国民史の執筆を絶っていた翁は、この年と次の年に亘って病んでいた。病床にあつて、こんな都都逸をつくって病と戦った。ユーモアと病氣とを戦わせていたのであらう。

江左風流七絶（明治三十九年中国旅行途次作 昭和二十五年書）

江左風流跡渺茫、明時宮闕亦荒涼、秋光十里金陵の路、野菊花开い

て細々香る。旧作を録して浅野大雅伯の誨を乞う 蘇叟八十八

絹本にサラッと書き、雅味の深い書である。浅野長武氏の蔵になつている。金陵は南京。次に掲げる雁門風雪七絶もこの詩と同じ時に作つた旧作であらう。

雁門風雪七絶（昭和二十五年書）

雁門の風雪長江の雨、身は飛鴻に似て定蹤なし、帰臥す湘南夢亦穩か、満窓の晴日蓮峯に對す。

展覽会には不出品のものであるが、私の好きな詩で書もい。宮田氏蔵。北の雁門関と南の楊子江と雪と雨の対比が大陸の大を思わしめ、そういう長途の旅の疲れを我が家に帰って養っている気持ちがよくわかる。定蹤——きまつた足跡。

国破山河七絶（昭和二十五年）

国破れて山河を愛じて新たり、肯て成敗に由り吾が真を喪はんや、首陽の兄弟応に相笑うべし、鉄面頑民未だ死せざるの人。蘇叟八十八

三茎の薇が書いてある。胡蘭成氏は「それ伯夷叔齊、殷末周初に当たりての事より、以来三千年、而して日本の敗戦あり、先生は徒らに国破れて民そこなうを悲しむにあらず、実に天下の礼義文明の亡ぶるを傷めるなり。この故に先生は近世日本国民史を著わし、以て世のために信を立つ。……余は先生の文章と書法とに於て、巨巖に当たれるが如く、ただ学力のみにあらず、すなわちその大節ありて能く然るものなることを深く感ず。その百巻の史書は、これを三茎の薇に得たりというも可ならんか」と言っている。成敗に由ると

は戦争の勝ち負けに由るという意。首陽の兄弟——首陽山に入つて周の粟を食らわなかった殷末の志士伯夷と叔齊。

曾不參禪七絶（作年未詳）

曾て參禪せず念仏せず、満身に青山の性靈凝る、半生閑却す屠竜の術、天地空しく留む有髪の僧。 蘇峯

屠竜の術とは元来は、実用に役立たぬ術をいうのだが、蘇峯翁の場合はそれが自分の本来の使命であると自認している天下の経綸と解すべきである。參禪もせず念仏も唱えず、且つ又自分の使命の屠竜の術をみがくこともなおざりにした有髪の僧が意味もなく生き永らえている。しかし、俺のからだには青山の性靈が凝っているのだ、いまに見えている、という詩意である。

東坡の七絶（昭和二十五年）

此の身常に外物と同じきに擬す、浮雲の变化蹤跡なし、君に問う何ぞ苦しんで我が真を写す、君言うこれを好んで聊か自適すと。福陵撮影芸術士大森君基道携贈頑蘇老人肖像 神采奕々風趣生動 感賞を禁ぜず 仍ち東坡の詩句を録して謝意を申ふ 蘇叟八十八
大森氏が撮つた蘇翁の写真はたくさんある。自分の仕事に精進して自適するような人がだんだん少なくなってきた。これは翁の自作の詩ではないが、蘇東坡を愛した翁の心情を知るために特にとり入れた。

経国文章七絶（昭和二十六年）

経国の文章跡煙に似たり、寧ろ期せん史を修めて前賢に較ぶるを、

一腔の熱血未だ銷尽せず、筆削す中興明治の篇。辛卯紀元節 蘇史翁 類 八十九

中興明治の篇は国民史の完結篇である。棹尾の努力を傾注しつつある八十九翁の意気を壯とすべきである。後出の忠憤志修史五言の「筆を投じて独り断腸」と併わせ味うべき詩。同じ日に「史を修めて国恩に酬ゆ」と書いている。ここまで漕ぎつければ安心も出来るであろうが、筆を休めていた時代に国民史に寄せた和歌一首に「晚晴草堂の手栽の銀杏色つきぬわか国民史いつか成るへき」というのがある。

自画自賛（昭和二十六年）

九転十起是れ吾が耐久の朋。 蘇叟八十九

九十に垂んとして、なお百までの感慨を示したものである。画は達磨である。他に堅山南風画伯の達磨に「挙一明三、目機鉄両」と賛したものもある。碧巖録の句で、極めて感度か鋭く利口なことを意味する語である。

湯盤石鼓七絶（昭和二十六年）

湯盤石鼓那んぞ論するを須いん、科斗胸に満ち稠って雲に似たり、興に乗じて一たび三寸の鉄を揮えば、天機発動して自ら文をなす。宮田雅宗手刻の図章を惠投す 金玉大小案上堆をなす 欣慰曷ぞ勝えん 卒に賦して謝意を伸ぶ 蘇叟八十九

湯盤、殷代の盤銘のこと。石鼓、周代の石鼓文をいう。共に金石古文を指す。科斗、最も古い初期の文字は、おたまじやくしの形をしていたので古い文字を科斗（おたまじやくし）文という。これは

源白石は新井白石。

忠憤志修史五言（昭和二十七年）

忠憤修史に志す、三十五星霜、完成す一百卷、立言更に堂々、老妣の墓木に供す、劫余孟光を喪う、頽然九十叟、筆を投じて独り腸を断つ。 静峯賢友の為に 蘇叟九十九

近世日本国民史脱稿の凱歌である。原稿二十三万余枚。百二十字詰新聞原稿で二千七百六十万余字。老妣の墓木―国民史の脱稿を待たずに先逝された静子夫人の墓標。劫余孟光をうしなうとは、掠奪に遇つて若さを失うの意。齊白石は、寿は劫の余といった。戦災で焼かれた町ほど立派に復興した如く、鏤骨一派をなした白石翁も蘇峯翁と同じく九十五の寿を保った。奪われるほど長生きをすることになる。齊白石は近代中国の代表的文人。翁と生没年を同じくしている。日本人で白石を見出した最初の人はおそらく蘇峯翁ではなからうか。

句（昭和二十八年）

忠魂永存。蘇峯正敬書類 九十一

翁の書はこの頃から泰山石絳の気を帯びてきている。私の出品した八十三歳書の「至誠」、また同じ年の「飛龍乗雲」は語意もちがうが「忠魂永存」の方が円熟していると思われるべきであろう。「平心無我」の筆意も絶妙。金に弱いといわれる日本人が、上野の山で列をつくってツタンカーメンを鑑賞している。私も行って見た。装飾品と芸術品を混同してはいけない。芸術品は装飾にも使えるが、装

宮田氏（遊記山人）に印章を作ってもらったお礼の詩であるが、翁の使った印章、特に晩年のものの大半は遊記刻である。宮田氏は篆刻にも書にも、本業の料理と同様に深い愛着と造詣と手腕をもっている。私は曾て遊記山人愛石賦なるものを作った。蘇翁の詩意が赴く方向と私の方向とが撓を一にしたことを誇に思っている。

巨刃摩天七絶（昭和二十七年）

巨刃天を摩し碧空を劈く、神光万丈望み窮りなし、大観の佳称説くを須いず、五岳巍然として眼中に落つ。 蘇岳大観峯展望 宮田詞宗 誨政 蘇峯九十叟 塩崎氏を伴つて九州に赴いたときに阿蘇山をよんだものである。

句（昭和二十七年）

師恩山よりも重し。昭和壬辰十一月二十一日同志社新島先生遺品館に於いて 及門蘇峯正敬書類 九十の記す 及門は門下生の意味である。

新島襄先生が若かりし時の蘇翁に与えられた歌いしかねも透れかしとてひと筋に 射る矢にこむる大丈夫の意地

明断源白石五言（昭和二十七年）

明断は源白石、能文は頼山陽、豈敢て先哲に擬せんや、特立主張あり、湖海知己存す、名山に蔵するを須いず。 静峯賢友の為に 蘇叟九十九

飾品はそれ以上のものではあり得ない。

翁の筆には出来不出来があるといわれる。李白や杜甫の詩もそうであり、王羲之や歐陽詢の書にあって然りである。不出来といっても凡俗のものではない。装飾品に対する観念に墮して相対してはならぬ。

東坡の句（昭和二十八年）

脚力尽くる時山更に好し、有限を以て無窮を趁うこと莫れ。是は東坡居士の句 吾人須らく拳々服膺すべき金誠なり 蘇叟九十一 翁は古語は別として、自作の語句を書くのを建前としていた。東坡は特に好きで書斎に羅池廟の碑拓を懸けていた。この碑拓は、翁の病床を見舞いに参向した宮田氏に、はずして持ち帰るように云われ、いま宮田氏の蔵になっている。劫を自ら歓迎していた翁は孟光は失うことはあっても、余楽の恩沢に浴していた人といえる。東坡の句の示す如く、有限の人生を以て無窮の羅池廟碑の生命を追うことは禁物だと観じていたことと思う。

貧不足羞の格言（作年未詳）

貧は羞ずるに足らず、羞すべきはそれ貧にして志の無きことなり、賤は羞ずるに足らず、羞すべきはそれ賤にして能なきことなり、老は嘆くに足らず、嘆くべきは老いて生を虚うすることなり、死は悲しむに足らず、悲しむべきは死して補なきことなり。 蘇峯老人 補は輔、人のためになること。別に九十五歳の時の句に「短褐論交天地の間」というのがある。褐は賤しい者の着る着物。

岡四郎氏（峽南山人）は私の畏友の一人である。全く文字通りの

短褐の風体をして旅行に出る。よれよれの半パンツでズック靴、工員さんの帽子をかぶり、棒切れを杖にしている。岐阜県中津川市の生まれである。今夏のこと、中津川で汽車に乗りうとしたところ「モシモシこれは一等車ですよ」と乗客に注意された。車中天地の間を論交し、乗り遅れでなく降り忘れすることもあった。こんな話を書かれるのは山人にとっては迷惑であろう。が、かっこいいデザインの流行する現代では、蘇峯遊いて短褐空しく、論交銷尽して巷説天地に満つと慷慨されるむきもあるであろうから、茲に紹介の労をとる所以である。峽南翁作游魂五言詩を録載して老生不慮、短褐未忌を地下の蘇峯翁に對え奉る。

胡坐す双六の嶺、感応無生を得たり、暗裡自ら明あり、湖光忽ち出現す、槍岳諸天に逼り、絳頭日辺に近し、首を回らせば殺生の谷、生死一瞬の險、梓棧道蜀に似て、眼下碧潭冷やかなり、水光脚底を照し、淨念我を開眼す、晴開松陽平にして、仰ぎ瞻れば剛稜已し、蘇溪に従って南下、閑々双脚を伸ばし、悠々恵岳に對す。

峽南翁は七十八齡にして毎夏北アルプス立山連峯を縦走する。真に、老いて生を虚うせざるものと謂うべきか。

句（昭和二十九年）

淡泊明志。中曾根賢友字を正せ 蘇叟九十二
政治家の心情を中曾根康弘氏に明示したものだ。檢察庁は中曾根氏からこれを借り受けて複製版をつくり、東京都を手始めに議士議員に配るべし。仕事がよほど楽になる。

一字（昭和三十一年）

壽 蘇叟九十四

清水董三氏長男の結婚祝に揮毫したもので胡氏絶賛の書。泰山の石経に伍すとは斯くの如きものをいうのであろう。

句（昭和三十一年）

老鶴万里の心。蘇叟九十五

鶯龍三冬臥、老鶴万里心（杜甫）。同年の作として雲海などもある。共に書として素晴らしい出来のものと思う。老鶴万里心は永逝四ヶ月前の書と聞く。

句（昭和三十一年）

其の中を執れ。岡村社長先生之を正せ 蘇叟

これも最晩年のすばらしい出来ばえの書である。泰山石経に伍すものの一つ。

衝天意氣七絶（昭和三十一年）

衝天の意氣百艱披く、一貫の精神独り自ら知る、功利紛々那んぞ数うるに足らん、丹心報国是れ男兒。友人蘇叟頽齡九十五書

称名（昭和三十一年）

南无觀世音菩薩。蘇峯九十五叟恭書

翁の大字の絶筆と聞く。八ヶ岳觀音平の碑に刻された。巧拙混沌雅俗不二の書というべきか。

句（昭和三十年）

怡然として余樂あり。郭仁兄のため 蘇叟九十三
郭氏は山水樓の料理長。怡然はやわらぎよろこぶさま。同氏が料理に精励するかたわら写真に深い趣味をもっていることを賞賛しての句であろうか。

眼中無一敵五絶（昭和三十年）

眼中一敵なく、百国和親あり、新年祥瑞の氣、凝って寰宇の春となる。昭和三十年新正有作 蘇叟九十三

句（昭和三十一年）

金毛の獅子は地に臥せず。林田学兄正字 蘇叟九十四
俗諺の「腐っても鯛」ということに通ずるだろうか。翁の句の対句を作ってみると「銀翼の老鶴塵界に降る」。これは「はき溜に鶴」の直訳で、中国でも雑学の部門でないと対句として承認されないだろう。翁はこれを見ればおそらく「余は詩人に非ず、塵界は風界とせざれば承服いたし難し」というにちがいない。前出の湖海虚名七絶の船山詞宗とのやりとりと併わせて考察すれば、翁の文人的な性情が窺知できるかと思う。

悠々九十四五絶（昭和三十一年）

悠々九十四、初日窓に映じて紅なり、延寿何の功德ぞ、無能の不例翁。丙申歲首偶成 蘇叟九十四

翁の肖像画の賛（昭和三十一年）

堂々童子、手に信じて描著、梅花香裡、白頭の閑客、神采奕々、浩氣潑々、仙に非ず、俗に非ず、賢に非ず、愚に非ず、独自の風格、特殊の骨相、審議すべからず、解説する能わず、留めて後昆に与え姑らく宿題となす。昭和丁酉元旦 蘇叟九十五

辞世の句（昭和三十一年）

一片の丹心渾べて吾を忘る。昭和三十一年十月二十三日 蘇叟九十五
この句は永逝の九日前に書いたので、絶筆となった。

川田順氏弔歌二首

日の本の歴史を書きてみつからも
歴史の中の人となりたまふ

天かけて終に歴史となりたまふ

噫我々の蘇峯先生

蘇峯翁の書蹟については、細かい審議解説を避けて、翁の名文を拝借。

堂々蘇峯、手に信じて揮毫、乾坤場裡、巨竜飛動、神采奕々、浩氣潑々、巧に非ず、拙に非ず、雅に非ず、俗に非ず、独自の筆法、特殊の布白、論説すべからず、端倪する能わず、留めて後世に伝え、永く鑑賞すべきもの也。昭和乙巳仲秋 雲外迂人時歳五十有五